

# オランダの宗教事情瞥見

——安田理深先生への報告——

大河内了義

安田先生、

此の春三週間程オランダに行つて参りました。もう此の世にお姿の見られない先生が「行ってこい」とおっしゃつたわけでは勿論ありませんけれども、私には先生のお言葉にうながされて出かけたような気がしてなりません。それ  
でこの場所をかりてやはり先ずもつて先生にその報告をさせていただきたいと思ひます。

昨年の四月ころ、大谷大学学長の廣瀬さんから、オランダのライデン大学で三週間『歎異抄』の講義をしてくるように、と仰せつかりました。「冗談じゃない」というのが私の最初の反応でした。たしかに私は真宗の寺に生まれ、曲がりなりにも大谷大学を卒業しました。しかし仏教学や真宗学を専攻したわけではないし、また大庭先生にお会いしたおかげでドイツ文化に眼を開き、その後ドイツの文学や哲学に縁が深くはなっているけれども第一オランダ語はできない。それに私はミッションということは嫌いなのです。「嫌い」などというおこがましい言葉をあらためますと、宣教だの布教だのをするほどの学問もないし、信仰もいまだしですから、とお断りしたのですが、廣瀬さんも、当時文学部長であつた訓覇さんも、聞き容れてくれません。その時、先生のお言葉が再びよみがえつてきたのです。先生、ご記憶でしょうか、数年前にレーゲンスブルク大学から、一、二年東洋思想について講義をしないか

と言って来たとき、心を決めかねて先生の自宅に伺ったところ、「大河内君、教えに行こうなんて思っはいいけない、恥をかきに行ったらいいのです」とおっしゃってくださいました。そううかがって心がぱっと開けたように思いました。本当だ、いつの間にか教師面しようなどと思っはいいけない、恥をかきに行こう、と気づいたら、「思い煩うことなく」というわけには参りませんでしたけれども、よほど楽な気持ちで一年余りを過ごすことができました。果してドイツの学生諸君が私を通して東洋や仏教の思想を学んでくれたかどうかは保証の限りではありません。しかし逆に私の方は、彼らとの交遊を通じてそれまでわからなかったドイツの面を知らされていろいろ学ぶことができましたし、その時の二三の青年とはいまだに交際があります。そうだ、今度もそのつもりで、と思っ直して、お引き受けすることにしました。

オランダにはこれまで二度ばかり旅行したことはありませんし、それに大きな国でもないので、大体わかっはいいつものでした。しかし今度ライデンに一人で住んでみて、当り前のことですが、そして勿論ヨーロッパという共通の枠内でのことですが、ドイツとはいろいろな点でかなり違っはいいつことがよくわかりました。同じゲルマン語でありながら、文字を見ればある程度見当のつくものもあるものの、耳で聞く限りは先ず全然わかりません。年配のインテリは立派なドイツ語を使っはいいつし、用事はドイツ語か片言の英語で足りるものの、通りでも市場でもレストランでも大学でも、みんなの話してることが理解できず、いつもガラス箱の中に入っはいいつようで、彼の人たちの生活の雰囲気を感じとれません。とりわけ残念だったのは、私の講義に出っはいいつた学生たちのうちで、問題意識を持っはいいつて何かを言っはいいつたいまた知っはいいつたいと懸命になっはいいつているように感じられた若者たちが、ドイツ語が十分でないために姿を消っはいいつたことではいいつす。ある国なり文化なりをある程度正しく理解するためには、そこで話されてはいいつる日常の言葉が少なくともある程度はわからなっはいいつといけなっはいいつない。公的な見解とか特別な事件とかは第三の言葉を通っはいいつて、あるいは通訳を介してでもわかりまっはいいつしょう。しかし通りすがりの人の何気なっはいいつない一言、若者たちの落書き、人が気を許っはいいつて話し合っはいいつた大衆

酒場でのやりとり、そういったものが感じとれない限り、骨は見えても肉体に触れられないのだ、ということを経日痛感しました。ですから以下申し上げることも、ドイツ語という窓を通して垣間見たオランダというにすぎません。

そんなふうでしたので到着後の三四日は、急に与えられたホテル住まいの自由な時間を半ばもて余し半ば楽しみながら、ライデンに十もある美術館や博物館（それらの大半が実に立派なもので所蔵品も豊富です。例のシーボルトの持ち帰った資料なども半ば以上は未整理のままこの国立民族博物館に保存されています）を見て歩いたり、車で三十分程のアムステルダムに出かけて久しぶりにレンブラントやフランツ・ハルス、またゴッホに再会したりしていましたが、やがていろいろな人と知り合いになりました。上智大学日本歴史学科の博士課程を終え、日本オランダ交渉史を終生のテーマとして、現在ライデン大学日本学科の講師をしつゝ研究に専念していらっしゃる鳥井裕美子さん、ウィーンのアラウヴァルナー門下の仏教学者で現在ライデン大学で主として龍樹を研究していらっしゃるT・フェッター教授（この人は京都大学の梶山雄一さんや上田閑照さん、大谷大学の雲井さんをご存知でした）、ヨーロッパ諸語で書かれた仏教書はほとんど読破していらっしやるアムステルダム自由大学の心理学教授R・H・C・ヤンセン氏、私のライデン行きに直接タッチしてくれたE・フェアヴァール氏、アムステルダムに支社を持つある日本の商社会社で活躍している神戸大出身の萩田文弥さん。この方たちには随分お世話になりました。それにおとらずお世話にもなりました嬉しかったのは、学生たちの数人が自ら買って出て、私の希望を聞いて連絡をとったり、案内したり、最後には私の重い荷物をもって見送りにさえきてくれたことです。こうした人たちの親切がなかったらわずかの期間にとにかくあれだけの見聞や反省はとも得られなかったに違いなく、しみじみと感謝の念を禁じ得ません。

こうした縁によって得られた私の見聞はしかし必らずしも心をたのしませてくれるものではなく、全体としてはむしろその反対のことが多かったようです。再々申し上げますように、極く限られた範囲の見聞ですし、私の予断もあると思います。しかし一言で言ってしまうは私はオランダの街に、そして人々の間に、ある極度にアモルフ

amorphな精神風土を見たように思えてなりません。アモルフ（無形式）とは、私の語感が正しければ、これから新しい創造が始まらんとするエネルギーの充溢したカオス（混沌）と違って、既存の一切の形式がこわれてしまった状態を意味するものと思います。私がオランダで見たこのアモルフな状態は、オランダの置かれた歴史や風土などの違いからもくるのでしようが、西ドイツのそれよりも更に徹底していて、百年前ニーチェが「今後二世紀のヨーロッパの歴史」と言い切った「ニヒリズム」の顕現と言っても言いすぎではないのではないかと思われるほどです。

ニヒリズムとは何かという重大な問いには勿論簡単には答えられないでしょうが、ニーチェの言葉をかき取って一言で言えば「従来の最高の価値が価値でなくなる」と定義できましょう。「従来の最高の価値」とはさし当り伝統的なヨーロッパにおいては先ずキリスト教ということでしょうし、世俗化の進行する近代以後は理性、ヒューマニズム、人倫道徳、科学、進歩、経済、社会主義その他、要するにその都度人間が最高の真理として立ててきたもの一切、ということになりましょう。それら一切が価値でなくなり、相対化され、無意味になり、茶番になり、アモルフになること、それがニヒリズムでしょう。そうした現象は大都会でもありかつ港街であるアムステルダムにもっとも顕著に見られるようです。アムステルダムと言えはすぐにヒッピー、フリーセックス、麻薬ということになっていくようです。それもありません。しかし私にもまして強烈な印象を与えたのは、うっかり「上を向いて歩こう」ものならたちまち踏んづけそうになる犬の糞でした。

アムステルダムは、パリ、コペンハーゲン、ウィーンなどとならんで、ヨーロッパでも最も美しい街に数えられて来ました。ところが今度行ってみるとひどく汚く不潔になっている、歩道のいたるところに紙くずや空き缶などがちらばっており、大公の見事なでっかいやつが文字通りひり散らされているのです。私は折あるごとに昔のアムステルダムを知っている年配の人たちにたずねてみましたが、みんな暗澹たる顔つきで私の意見を肯定するのです。案内してくれた学生のドゥ・ジョング嬢の話によると、清掃回収される糞が年間何万トン（あまり膨大なので正確な数字

を忘れてしまいました(か)になる由です。

ヨーロッパの街が大変美しいことはここで私がこと更申し上げるまでもないことです。近代的中央集権国家の形成される以前から経済力は勿論軍事力まで備えた各自由都市が文化を培い支えてきたという歴史からすれば、ヨーロッパ文化とは何よりも都市文化であり、その都市が人工美の最たるものだったことは当然のことでしょう。しかし残念ながら直接には一九六〇年以後のヨーロッパしか知らない私には、その見事な都市も、例えば羽仁五郎氏のように、無条件の礼讃の対象にはもはやありません。「栄光ある過去」の遺産があまりにも重すぎるのです。相当の努力と費用とをつぎこんで維持に努めているのでしよう、依然として美しいことにはまちがいありません。しかしむしろだからこそ荒廃の跡は見まごうべくもないのです。それは建物や道路や公園という物によりもむしろそこに住む人間にはつきり現われているようで、今ではパリですら夜のメトロは女性一人で乗れるものではなくなっています。まして人種のるつぼである港街アムステルダム治安がおかしくなり不潔になっていくことは、第二次世界戦争の結果海外の植民地の大半を失い、まして現在の不況下で経済地盤の沈下しているヨーロッパでは、いわば必然のこともありましょう。それにしてもこの犬の糞は一体どうしてなんだろう、と私は考えこまざるを得ませんでした。

犬の糞がかくも多いということはとりもなおさず犬の数がそれだけ多いということでしょう。ヨーロッパには野犬とか捨て猫はまずいません。ペットが人間以下の存在である以上、病弱とか人間様の都合とかでその生命に責任をもてなくなると、人間の責任において棄殺その他で安楽死させる、勿論それ以前に必要とあらば避妊手術を受けさせる、というのが常識でしたから。ところがこうした人間の任意意識が最近かなりあやしくなってきたようです。ヴァカンスに出かけるのに邪魔になるペットをブローニユの森の樹にくくりつけたまま行ってしまふ人が多くなったことを歎く新聞記事を読んだこともありますし、当然だった犬の尻の始末も今や行なわれないうことでしょう。野犬にはせず、しかし尻の始末はしないということになれば、アムステルダムの歩道がかくなるのも当り前の話しなんで

すが、そんなに当り前とは思えないのは、一体なぜそんなに多くの人が犬を飼うのか、という点です。

数年前ミュンヘンでドイツの錚々たる哲学者神学者の集まる会議に招待されたことがあります。その議論の多弁と難解さと抽象性にほとほと困じ果てたあの日の午後、近くのエングリシア・ガルテンに逃げ出しました。木蔭のベンチに腰かけてぼんやりしているうちにふと気づいたのは、先ず犬連れが大変多い、しかも犬の面相と犬を連れている「ご主人」の面相が酷似している、また犬連れは男女を問わずたいい一人者が二人者、つまり子供のいない人だ、ということでした。ここまで申し上げればもう先生にはおわかりいただけるでしょう、つまり犬は人間の子供の代用品なのです。デカルトによれば、理性の未発達である子供はまだ人間ではないのだそうで、したがって悪であり、少くとも邪魔っけなものだから、なるべく少い方がよろしい、いやないのが一番よろしい。ついでに、夫婦と言ったところで、ベター・ハーフだの生涯の伴侶などというのは十九世紀までの神話にすぎない、何のために苦しめ合って生きていかねばならないのか、うまく行かなければさっさと別れるのがよろしい、と言うわけでしよう。ふざけ半分で申し上げているわけではありません、「ラチオ」でもって推論すれば論理的帰結としてこうならざるを得ないということを申したいのです。つまり人間がどんどん孤立しアトム化していく。しかしそういう孤独に平然とあるいは毅然と堪えられる人がそんなに多くいるわけではない。人間生きものである限りやはり生きものの温みが欲しい、しかも一段と低次の、極言すれば、ヒューマニズムによる良心の苛責なしに生殺与奪の権利をふるえるベツトの方が「まだ人間ではない」子供なんぞよりも面倒が少い……。誰もそうはつきりは口にしません、つきつめていけばそういうことになる。しかも自分の住まいの中で垂れ流さないようにさえしつければよいとなれば、こんなに安直で忠実におまけに盗っ人よけという効用までついた代用品はまたとないでしょう。その結果がああ歩道上のていたらく、とは考えられないでしょうか。

加えて麻薬です。いつからか知らないのですがアムステルダム市は麻薬の所持及び使用の禁止を法的に解いてしま

いました。理由は審かにしません。恐らくはデンマーク政府がボルノグラフィを解禁したのと同様、全体の趨勢に従ったまでということでしょう。その結果少し大袈裟に言うところのヒッピーが集まるということになりました。勿論麻薬常習者は人口の極く一部にすぎません。それでも街のいくつかの地域では、真昼間から夢遊病者のような中毒患者がたむろし、二人連れでパトロール中の警官と一見仲よくやっているような風景を目にします。別の犯罪が起こらない限り手が出せないからです。麻薬が恐ろしいのは、種類にもよりますが、常習者をいずれば癡人にしてしまうこと、その途中で、いかにしても麻薬を買おうとして金を工面すべく別の犯罪を引き起こすという点にあります。その犯罪がどの程度かは住民の構っている自衛手段を見れば見当がつかます。例えばフェアバール氏は、以前はエキゾチックな美しさをたたえていたに違いないある中国人街の通りに面した家に住んでいます。一階のガラス窓の部分には全部鉄格子がはまっており、入口の扉は二重、家中で外出する折は留守をさとられないように裏口から出るということ。それでもひたくりから殺人までの犯罪が濫発するため、遂に市当局は、中毒患者に麻薬を無料配布すれば少くとも犯罪は防止できるのではないかとまで考え出している由です。これは、夜は私も怖いですから、と言って昼間にこういふ地域を案内してくれた学生ヨッケ君の話です。

そのアムステルダムにあの世界に冠たる帝国博物館をはじめとした多くの絢爛豪華な美術館博物館があるのです。先にも申したように、これはアムステルダムに限ったことでなく、オランダの一寸した街がみなそうで、しかもそのコレクションはまさに全世界から集め（？）られた財宝というにふさわしい。ケンランゴカの前すべてが掠奪品などとは申すまい。しかしそうした富と文化が作り上げられた背景に、十七世紀から今世紀半ばに至るまでの植民地からの収奪ということがあることは否定できないでしょう。王宮、教会、市役所など公共の建造物をはじめとして、運河沿いに建てられた、ルネサンス様式のファサードをもった六階建七階建の立派な家並、かつては富裕だった「商人」たちの私有物、もその例外ではありません。苛酷な自然的条件を克服して全世界に航海し貿易を起こし富を蓄積

したことは、まさにファウスト的精選の結果であり、それ自体偉大な事業ではあったのでしようが、しかし現代の非ヨーロッパ人の眼からみれば、例えば和辻哲郎氏のように、「日本人には航海王ヘンリーの精神が欠けていた」などと無責任無批判なことを言ってしまうわけには参らない。その植民地の大半を失った今、その精神がどうなったかを考えざるを得ません。あるいはまた、美術館にかけられている十七・八・九世紀の豊かで子沢山の家庭団樂の絵画と現代のアトム化された人間図とは一体どう関わるのかをも併せて考えざるを得ません。

さきほど一寸離婚のことに触れましたが、離婚そのものよりももっとショックなことは、以前とはすっかり変わった若者の性関係、もっと正確に申しますと、変化した若者の性関係がすでに社会に受け入れられているという事実です。これは西ドイツの話ですが、ギムナジウムが学校の行事として生徒をキャンプに連れて行く時に、学校によっては、勿論保護者との話し合いの上で、十四・五歳の女生徒に避妊薬を与えて性体験をさせるということを、高校の先生をしている友人に聞きました。この傾向にはますます拍車がかかって、大学生の「同棲」は極く当然というよりも自然のことで、大人の社会がそのカップルを夫婦と同じように扱っています。当人たちもそれをごく当然のこととしている、反抗でも何でもないし、いわゆるチャンとした家庭でもそうです。プロテスタントの牧師の中には、そういう経験をした人たちは比較的離婚率が低いからという理由で黙認でなく是認している人もあります。ある別の友人が、そのことをいけないという理由など一つもない、せいぜいのところ、性衝動を他の創造行為に転化するところの、フロイトのいわゆる「昇華」が行なわれなければならないことくらいではないのか、これはまさに性革命だ、と些か途方にくれた表情で話してくれたことがあります（「何故？」に対する答えがないこと、というのはニーチェの下したニヒリズムのもう一つの定義でもあります）。これには、容易に手に入り、しかもただ飲むだけという避妊薬の發明が大いに力をかしているわけで、やはり科学技術の「発展進歩」と無関係では決してあり得ない。さっき一人の女子学生のことをドゥ・ジョング嬢と紹介しましたが、彼女は十歳の坊やの母親で、坊やの父親を「この子の父」とい



う言い方をするので、審かしげな顔つきをした私に「ちゃんと結婚してなどいけませんもの」と何のくったくもなく実にあっけらかんとして答えてくれました。こういうことから考えますと、いよいよ増加していく中高年層の離婚という現象も、私にはむしろ若い世代の性関係の「革命」的な変貌に大人の方が影響されたのではないかとすら思われます。いずれにしろ、近代社会が成立させた一夫一婦による結婚という形式、ましてヤカトリックにおける秘蹟ミラクルとしての結婚という形式は、大幅にこわれつつあるとは言ってもよいでしょう。

その他、同性愛の問題、父親が学資を出さないと行って法廷斗争に持ちこんだ息子の話し、大学の口頭試験の結果に不満をもって教師を訴えた学生の話しなど、申しあげればきりがありません。勿論こういう事件は例外的なことなのでしょうが、あっても不思議ではないという雰囲気であることはまちがいないように思われます。つまり申し上げたいことは、従来の人間関係のあり方の形式が、したがってまた人間と動物との関係も、従来はキリスト教的市民道徳の裏づけによって強固なものであっただけに、今物の見事にこわれつゝあるという事実です。アモルフという言葉で表現したかったのもこのことです。しかもそういう現象が、特に若い世代にあつては、決してこそこそした秘め事であつたり良心の苛責を感じたりというふうではなく、反抗ですらなく、至極く当り前の、明朗とすら言えるほどあつてからんとした現象であるという事実なのです。こうしたアモルフさ、これはまさしく「ヨーロッパのニヒリズム」の顕在化以外の何ものでもないのではないのでしょうか。いやそれはニヒリズムなんていう「精神」のできごとではない、帝国主義期にはいった資本主義体制の必然的結果である、というイデオロギー上の見方もあり得るでしょう。しかしこの論にはあまり説得力がないように思われます。というのは、今申し上げてきたような現象は、オランダや西ドイツほど顕著ではないにせよ、東ドイツにもハンガリーにも、多かれ少なかれ見受けられるからです。しかもこれがヨーロッパにとって避け難い必然の傾向であるとするならば、そしてまた日本の「近代化」「工業化」が「西欧化」と不可分であるとするならば、このアモルフな現象は日本においても不可避なこと、いや部分的にはすでに顕在

化しつつあると考えるべきなのではないでしょうか？ これこそわれわれ自身の問題であると思われなりません。

先生、筆のおもむくままに見聞の次第を長々と申し立てて、お聞き苦しかったことと思います。わざわざオランダくんたりまで犬の糞を調べに行ったわけではありませんのに。お許し下さい。

さきほどからアモルフとかニヒリズムとかいう言葉を使いました。ニヒリズムといえば当然非ないし反宗教的ということになりそうです。深いところでは事実そうかとも思いますが、しかし一見したところではむしろ反対です。なるほど都会の新旧キリスト教の教会の多くは鍵がかかっていて入れませんでしたし、アムステルダム王宮の隣りにある立派なプロテスタント教会は、何かの展示会らしい催し物の会場にしつらえるべく、トランジスターでやかましい音を鳴らしながら職人さんがかちやちやして、入って行ったら叱られてしまった、などということもありました。だからと言って人々の「宗教的要求」がないというわけでは決してなく、むしろ若者にも老人にもその要求はかなり強いのではないかと思われれます。ただしこれがまた、先取りして申し上げますと、極めてアモルフで（これにはオランダに宗教的寛容さの伝統があること、幾世紀にわたる海外貿易及び植民地経営のため、新旧キリスト教、イギリス聖公会、ユダヤ教、イスラム教、更にはインドの宗教やクリシュナ運動までが共存しているという事情が働いていることはまちがいありませんが）、さまざまの宗教運動が本當の宗教心の発露なのかどうか、私にはわからないままに終わっています。それでここでは私の直接見聞したことのみを二三報告させていただきます。

その第一は神智学協会です。向うへ行行ってからはじめてわかったことですが、ライデン大学の全学部にわたる教養講座みたいなものなかに神智学協会から給与の支給される教授席が二つあって、その一つを非常勤でつとめているE・フェアヴァール氏の宗教学講義の枠で、主としてその講義に出席している学生を対象として話しをしる、ということでした。文学部のインド学、日本学、中国学、朝鮮学などの学生にも聞かせる予定ではあったらしいのですが、

揭示などの遅れでその人たちはあまり来ていなかったようです。したがって良い意味でも悪い意味でも狭いアカデミックな雰囲気の中で話さなければならぬということではなく、物足りなく思うと同時にほっともしました。私のところへきていた学生——と言っても大半が三十歳前後で、失業のため再修学をした人（奨学金が出る）や仕事もっている人もいました——の中にも神智学協会に所属している人が数人いて、その中の一人ヨッケ君の案内である日曜日、アムステルダムの中東十数キロ、ナーデルンという街の郊外にある神智学協会の本部を訪れることができました。

神智学 *Theosophie* とは語源からすれば *theo*＝神、*sophia*＝智慧ですから、神に関する智慧ということでしょう。つまり唯一の真理に到達するために哲学・神学・その他の諸科学を総合したある世界観といえます。こうした傾向は古代ギリシヤから存在していて、禁欲主義、神秘主義、占星術、オカルトなどの要素の混在した一種の折衷主義の形をとることが多く、新プラトン主義、キリスト教内部では異端視されているグノーシス派、ヤージュベームやある時期のシェリングにも見受けられるといわれています。なかんずくインド思想は神智学的研究の宝庫とされていて、ヨギー行者も時として神智学徒と呼ばれることがあるようです。しかしここで申し上げたいのは、それらと無関係ではないのですが一応は別の、ヘレーナ・ベトロヴナ・ブラバツキーというドイツ系ロシア人の女性によって一八七五年にアメリカで創設された神智学協会 *Theosophische Gesellschaft, Theosophical Society* という独立した運動体のことです。この女性は若い頃から特異な性格と霊媒的能力でヨーロッパやアラブ世界での交霊術会議などで目立った存在だったらしいのですが、一八七三年にアメリカに渡り、やがて旧南軍将校で交霊術関係のジャーナリストだったヘンリー・オルコットなる人物と知りあい、大いに意気投合した二人は「神智学協会」なるものを設立、さかんな著作・講演活動を通じて信者を獲得していきます。やがて二人は一八七九年インドに渡ります。ブラバツキーは此の頃、ヒマラヤの奥地で二人のマハートマの指導のもとに修行をつみ、世界の秘密を伝授されたのだ、という説を作りあげ、さまざまのトリックまで用いて信者を集め、一八八二年神智学協会の本部をマドラス近郊に建立します。この

間に神智学の教説は著るしくインド思想をとり込みます。しかし、教勢の拡大とともに内部に不和が起こり、スキヤンダルに巻きこまれた彼女はインドを去ってヨーロッパに渡り、やがてロンドンに居を構え、一八九一年に亡くなりました。ロンドンに滞在中にアニー・ビーサントという女性の弟子を獲ますが、この人が大変すぐれた人格と教養をもった人であつたらしく、一九〇七年にはビーサント夫人が第二代会長になり、ヒンドゥー的色彩が更に濃厚になつていきます。彼女自身一八九八年ベナーレスに設立された「中央ヒンドゥー学会」Central Hindu Collegeの会長に選ばれてもいます。神智学協会はやがて全ヨーロッパに拡がりますが、最近ドイツの「シュタイナー学校」で日本にも知られたしたルードルフ・シュタイナーの**人智学 Anthroposophie**も、もとはこの神智学協会からの分派と言つてよいでしょう。ビーサント夫人はまた、インド生まれのあるバラモンの少年をキリストの生まれかわりと称してヨーロッパに連れて帰えり、教育をほどこしたりします。しかしこの少年（クリシュナムルティ）自身が自分はイエスの生まれかわりなどではないといわば人間宣言をするというようなこともあつたようです。

神智学の教説の核心になるものは、ドイツのインド学者ヘルムート・フォン・グラゼナップによると、おおよそ次のようです。「世界の一切の宗教は真理の外観にすぎず、人間悟性に内在する限界に応じた部分的真理しか含んでいない。神智学は一切の宗教に内在する精髓を開陳する。そのために一切の真理を判断する不変の規範となるべき教義体系を作りあげた。その基礎をなすものがエジプトの死者の書、ウバニシャッド、道徳経、ピュタゴラス、プラトン、聖書、キリスト教神父たち、グノーシス派、カバラ、スーフィー教に至るあらゆる時代の智慧を一つのまとめた全体へと統一するところのブラヴァツキーの著書にほかならない……したがって神智学協会の使命は彼女が予言者に伝授されたとする内容を解釈し、体系的に要約し、オカルト的視点からの新しい成果によって補完することにあるとされる。」(Helmut von Glasenapp: Das Indienbild deutscher Denker 1960)拙訳『東洋の意味』法蔵館一九八三年)

神智学についてこの程度の知識は持ち合わせてはいたものの、オランダでその実体に出合うとは思つてもみません

でしたので、さきほど申しましたように、早速ヨッケ君にお願ひしてナイデルンに連れて行ってもらったわけです。神智学がどういふ経路を通じてオランダに定着したのか審かにしていませんが、ある富豪の寄進だという広大な敷地には礼拝堂、集会所、瞑想場、宿泊所、図書館、菜食レストラン、迎賓館等々の建物が点々と建っています。先ず礼拝堂の勤行に参加したのですが、建物は、大きく窓をとった明るいモダンチャーチという感じで、数十人分の席の八割方は埋まっていました。勤行にはお香をふんだんに使うロシア正教の様式がかなりとり入れられているようで、それはお坊さまの法衣にもうかがわれます。言葉ができませんので勤行の際に歌われるものの内容はわかりませんでした。そのあとブラント神父（と言っても奥さんも子供もあります）に菜食による昼食に招待された折の話しやヨッケ君の説明によると、この教会は自由カトリック教会あるいはリベラルカトリック教会と称し、イギリスで教会がローマから分離して英国教会になったとき、それをよしとしなかったオールド・チャーチが神智学協会と結びついたものようです。生活様式はひどく禁欲的で禁酒禁煙、法的未婚者の性交渉禁止という禁止だらけのようです、少なくともこの敷地内では守られているとのことです。午後のお茶にも招かれて迎賓館に参りましたが、広大な家に初老と中老（？）のご婦人が二人留守番をかねて任んでいられ、数年前ここにダライ・ラマが客人として滞在したこと、だんだん協会員が減少して日曜日の勤行も午後一回になり、菜食レストランも目下閉鎖中、全体の維持のために敷地の一部を売ったりしていることなどの話をうかがいました。どの建物にもブラヴァツキー、ピーサント両夫人の肖像画がかかっていますが、この二人の女性の容貌のあまりにも対象的なのに些かの感慨を抱きました。ブ夫人の方は多分にロシア農婦的な、しかも喰いつきそうな怪異な容貌であるのに対して、ピ夫人の方は実に優雅で気品にあふれている。生前のピ夫人に面識のあるブラント神父の言葉によると、ピ夫人からは不可思議な光が輝き出していて、実際は小柄な方なのに巨人のように感じられて思わず跪いてしまうというような人だったとのこと。ピ夫人の代になってから協会が一段と昂揚期を迎えた理由も案外このあたりにあるのかもしれない。支部がウィーンにもヴィー

スバーデンにもあるとのこと。一緒に来ていたドゥ・ジョング嬢は協会員ではなく、かなり批判的ではありましたが、それでもクリシュナムルティの著作は是非読むようにと熱く促すことができました。ナーデルンを辞してからアムステルダムで一人住まいをしているヨッケ君のアパートに立ち寄りましたが、彼は協会の何とか委員とかで、さして立派な家具もない部屋の壁に立派な法衣が飾ってあり、その前には香爐と白の大きなローソクとが置いてありました。この一日は私にとっては強烈なというよりもむしろ一種不可思議な、整理のつかない混沌とした印象を残しました。乏しい知識とわずかな経験でもって性急な判断を下すことはさし控えるべきでしょうけれども、こうした宗教とも哲学ともオカルトともつかぬ折衷主義的な精神運動がある種の魅力をもって人々の心をとらえる精神風土は、やはり先に申した全体的なアモルフ傾向と無関係とは思えません。

もう一つご報告したいことは、アムステルダムにいわゆる「メディテイションセンター」なるものが三つもあることです。一つはユダヤ教系、一つはヨーガ系、最後の一つは折衷派ともいべきもので「コスモス」という名前です。「コスモス」はアムステルダム中央駅から歩いて数分という足場のよいところにあるかなり大きい建物にあり、入口に催し物が二週間単位で掲示してあります。一階は大きなホールになっていて、どならないと話ができない程の楽音騒音の只中で衣服も髪型もさまざま、ヒッピーとたけのこ族とパンク族とをごっちゃませにしましたような大勢の若者が立ったり坐ったり寝そべったり抱き合ったりの思い思いの恰好でたむろしていました。角にバーみたいなのがありました。アルコール類は売ってないようです。二階から五階まで(あるいはもっと上まであったかもしれませんが)には大小さまざまな部屋があり、そのうちのひとつ、講堂というべきでしょうか、二百人は楽にかけられ、舞台もある大きな部屋に案内されて、一時間程話しをさせられました。講堂内の左右の壁ぎわに禅堂まがいのしつらえがあって、頭髮を全部あるいは半分剃った若者が四・五人、話しの始まる前から終ったあとも、身じろぎもせず坐禅らしきものを組んでいました。聴集は五十人ほどだったでしょう。比較的年配の人が多く、熱心に耳を傾けてくれました。

あとで質問が出たのですが、印象に残ったものは、初老のご夫婦（インドネシア系の人と見受けました）が、念仏がなかなか申せませんがどうしたものでしょうかとおたずねになった。正直に、私もそうです、とお答えしたところ、ご亭主の方はキョトンとしてられましたが、奥さんの方は二度三度深く領いて、はい、はい、とおっしゃった。思わず私も頭が下ってしまいました。お二人は真宗の信者だと自己紹介され、ベルギーのブリュセルにある本願寺からときどきベルギー人の坊さまが出張布教なさる由でした。もう一つの質問は、あなたはここで浄土真宗の布教なさるおつもりか、というものでした。私にはそのつもりはない、教えは拡がるものであって拡げるものではないであらうし、私はむしろ教えられることがあればと思つてやってきました。またそれぞれの宗教が自派を宣教することよりも、各宗教が他の宗教との真剣な対話することによって自己の宗教性を批判することこそこの非宗教的時代に最も大切なことではないかと申したところ、「私の師匠（インドの人らしい名前でしたが聞きとれません）も常々そうおっしゃっている」とわが意を得たりという顔をなさった。そのあと例のホールに降りて、まだ三十代とおぼしい主催者の一人と少しの間言葉をかわしましたが、その折に、この「コスモス」の運営は三分の一が市の補助であとは入場料や会費でまかなっている由を知りました。

二度目に「コスモス」を訪れたときは、この仏教徒の話はあまり魅力がないとわかったのでしようか、小さな部屋に案内され、十人程の人が集まったのみでした。前のは別の主催者は、近くの部屋でチベットの舞踊団が演じるので少しやかましいかもしれないが辛棒してくれと言いついて出ていきました。この時は話しが「悪人正機」に触れ、キリスト教的に言えば「イスカリオテのユダとは私である」ということになるのではないかと、少し大胆なことを口ばしたところ、「異端」をめぐって参集者の方からの発言が多くなり、一人の老人（さまざまに混血のせいでしょうか、およそ何人種かわからない小柄な男性でしたが）が、グノーシス派を異端として切り棄てた時からキリスト教の墮落が始まったのだ、と激しい口調でぶちあげ、たまたま人にいただいたブドー酒の瓶を側においてタバコの火を

つけた私に向って、急にオランダ語で何か叫びました。あとで聞くと、酒を飲んだりタバコを喫ったりする人間は地獄行きだ、という意味のことだったらしく、苦笑せざるを得ませんでした。ここでもまた何とも整理のつかない奇妙な印象が残りました。

爽かな印象を残してくれたこともあります。それはユトレヒトに足をのびた時のことです。街の中心部は昔のままでしたが、駅の周辺は十年前と見違えるほど「近代化」しており、ホテル、レストラン、アパート、劇場、ヴァレーポールコート、展示会場、駐車場などを含んだ途方もなく大きなショッピングセンターになっていました。その一隅に三十脚くらいの椅子を置いたチャペル風の部屋とその隣りに事務室兼応接室といったふうの二部屋からなる「サイレンスセンター」なるものがありました。チャペルの正面の少し右寄りのところに十字架はかかっていましたが、キリスト教徒であるなしとは無関係に、心に悲しみや悩みを抱く人、心を静めたい人、あるいは単に疲れをいやしたい人など、誰でもここに入ってしばしの間静かな時を得られるようにという主旨で作られたもので、事務所の人（と思ったら、男の人はプロテスタントの牧師さん、ご婦人はカトリックの尼僧でした、極く普通の服装なんです）のお話によると、この土地の一部に以前三人の尼僧の住まう僧院があって、この馬鹿でかいショッピングセンター建設の折に売却を迫られたので、こうした沈思のための場所をもうけることを条件に手はなしたのだそうです。全くのエキキュメニカルな仕事で、日曜日にはさまざまな宗教の人が午前と午後と一回づつ説教をする由。ショッピングセンターのあちこちには失業者とおぼしき人たちがたむろしているのを目にしましたので、そういう人たちが簡易宿泊所がわりに使わないかとたずねましたら、「ですから残念ながら夜は鍵をかけざるを得ませんし、日中でも酔っぱらいが入りこんでくるときなど腕力がいらいますよ」とおだやかならぬ言葉とは裏腹に実に柔和に破顔一笑される牧師さんの姿は実にさわやかでした。パンフレットなどいただいたのですがオランダ語なので、夏休みにでも辞書を片手に謎解きを試してみようと思っています。消費をほとんど暴力的に強制する資本主義的装置の典型ともいうべきショッ



ピングセンターの只中にひっそりと沈思の場所があるということは、考えようによってはアモルフそのものとも言えましょうけれども、私にはひどく奥床しくなつかしいものに思われてなりません。

土地の言葉を解さない私が、しかも短時間の間に経験した多少とも「宗教的」なことがらと申せば、この程度のことで。ですからこれがオランダの宗教事情などとはとても申せません。また、石の文化に育てられた、あるいは逆にそれを育てたキリスト教は何と言っても堅牢で、たとえこわれるとしてもそれこそニーチェが言っているように「時を要する」でしょうから、そのキリスト教に言及しない限り、宗教事情とも言えないでしょう。せいぜいのところオランダの都市における種の宗教運動ないし形態への警見にすぎません。またすでに申しましたように、こうした一見宗教的な動きが、本当に宗教的なものなのか、擬似宗教的なものなのか、それどころか非宗教的なものでさえあるのではないのか、という点については、今のところ何とも判断しかねております。

先生、本来ならばこれから私がライデンでどう話しよう恥をかいたかというご報告をしなければならぬのですが、正直なところあまり報告するに足ることはありません。出かけ前にあわただしく書き認めた原稿も、十分に了解しているとはとうてい言い難い『歎異抄』の幾章かをこれまた不十分な外国語で語るためのノートですから、学生諸君から鋭い反応を期待することははじめから無理だったのだと今思いかえしています。毎回講義のあと行なったディスカッションの部分を取ってとってもらっており、今度それを更めて聞いてみました。すれ違いに終わった点が多いという印象を受けます。そのこと自体が、ヨーロッパと格闘することを覚悟した私にとっては大きな課題になるわけです。ただ今はほんの二三の点にだけ触れてこの報告を締めくりたいと思います。

講義を始めるに当ってP・ティヒの「絶対的関心」に触れて、宗教が宗教であるかぎりどの宗教もそれぞれに絶対的真理に関わるが、その各宗教間でいかにしてまたいかなる場所において対話が可能であり得るか、という点を問

題にしました。そして「わけのぼる麓の道は多けれど」という古い諺を引いて、「高み」に至ってはじめて、もっと正確に言えば、絶対的真理である「高み」だけがはじめて、そこに到るすべての道を見渡し得るのであって、各人は一つの道を歩む外はない、その道は歴史的文化的条件つまり縁によってすでに与えられており、与えられているものを自己のものとして選びとる決断から一切が始まるのであろう、というようなことを述べたところ、ファン・ライン君が「宗教市場にこれ程多くの商品が提供されているのに、どうして一つしか買えないのか」と早速反論してきました。司会役を兼ねていたフェルヴァール氏がそれに同調して、自分もともとロシア正教から出発したが、鈴木大拙先生にお会いして以来佛教にも関心を抱いている、先生も「禅も念仏も同じだ」、とおっしゃっているではないか、自分はマリア様と同じように観音様を礼拝している云々と力説しました。私も強く反論し、鈴木先生はいざ知らず、すべては同じように尊く、それぞれの美点はそれなりに評価できるとおっしゃる貴方ご自身は、一体どういう立場に立っているのかとたずねたのですが、問題点がずれるだけで一向に話しが切り結びません。その時、五十がらみの紳士が「それはシンクレティズムであって一つの世界観にすぎないのではないのか」と、私ののどまで出かかっている言葉を物静かに、しかしきっぱりと云ってくれました。あとでわかったのですが、この人がヤンゼン氏でした。こうした折衷主義的世界観をそんなものは宗教ではないと言って否定することはむしろ容易でしょう。しかし日本にも、われわれの中にすらあるこうした事実を自分のこととしてどうとらえなおすかということになると、目下の私にはうまく処理できない問題です。

もう一つ、二時間目の講義だったでしょうか、浄土教における自力他力・難行易行を説明したところ、先ほどからその名をあげているドゥ・ジョン嬢がむっくと起き上って（彼女講義中でもよく横臥していました。これまたアモルフの典型でしょうね）、「念佛することがどうして容易なんですか、坐禅をするよりうんと難しいはずでしょうが」と刃物で切りつけるような鋭い問いを発しました。これには先生、とても嬉しかったです。彼女自身その問いの重大

さに気づいていたかどうか定かではありませんし、「易往而無人」なる言葉はその後の私の話して彼女ははじめて知ったものです。まして彼女が念佛の信者になるかどうか、正直のところ私には全くどうでもよいことです。多分なりはしないでしょう。そうであっても、たとえ一瞬であっても、この一言は私には実に貴重なものであったことを報告させていただきます。

オランダのあと、西ドイツ、スイス、オースタリー、ハンガリーを廻って四月中旬に帰国したところ、すでにライデンからの便りがいくつか待っていてくれました。そのなかのヤンゼン氏の手紙にこういう言葉がありました——「貴方とお知り合いになれたことは大変嬉しいことでした。貴方のお話しは、研究対象としての佛教学というようなものではなく、貴方にとって唯一の重大事が語り出されているという強い印象を私に残してくれました……貴方と交わした個人的な対話においても、まさにここに佛いますというように感じられ、まことに有難いことでした。是非近いうちに再びオランダにお越しくださいませよう、いつなりともわが家にお泊り下さい……」

先生、もしこの言葉が私個人に向けられたものだとしたら、それはヨーロッパの人にまゝありがちな誇張された外交辞令ととるべきでもありません。しかし私にはこれは佛道そのものに対する礼拝であり、同時に「いよいよ佛道修行にはげめよ」というヨーロッパからの声であるように思われてなりません。それを思うにつけても、直接オランダ側と接触してくださった長崎の三角紘容さん、がむしゃらのしろうとである私に「行ってこい」とおっしゃった大谷大学の廣瀬さん、布教などできませんと申しあげた私に「信者をつくろうなどと考えてはいけません。すべては縁です。ご苦労さまです」とおっしゃってくださった東本願寺の五辻総長に、そして一切が聞法であることをつとに教えてくださっている先生に、心から御礼を申し上げることよりほかに何も無いことを更めて私に知らせてくれた手紙でありました。先生、有難うございました。

付記 これは一九八三年六月二十二日 大谷大学真宗総合研究所で行なった報告をもとにしたものである。